

Title	「インワ時代」(その一)
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.1-p.18
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80347
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「インワ時代」(その一)

服 部 正 一

“Ava Period”

by Masaichi Hattori

နမောတဿာဂဝတောသရတတောသမ္ဗာသမ္ဗုဒ္ဓဿ

(ဂဏှတုံ) ၂၀၈၅၅ ဇေး သား သဲသော "ပင်း ယန့်ငုံစင်ကိုင်း ခေတ်" ကိုဆက်
လက်၍ ဇေး သား မည်ဖြစ်သဖြင့် "အင်း ဝ ခေတ်" အမည်နှင့်ပင်တင်ပြအပ် ပါ မည်။
အင်း ဝ ခေတ်၌ မူကား မြန်မာလူမျိုး တို့သည်လွန်ကဲသောပင်း ယန့်ငုံစင်ကိုင်း ခေတ်
၌ ဩဇာသက်ရောက်သောဂှမ်း လူမျိုးတို့၏လက်အောက်မှလွတ်ထွက်ရန်လုံး ပင်း ဩ ဇ်
မြန်မာလူမျိုး တို့၏မည် ကျေး မှုကိုတည်ထောင်ရန်ရည်မှန်း နေသဲလေသည်။ ဤခေတ်၌
မှတ်သား ဘွယ်သာအချက်အကြီးဆုံး သောအဖြစ်အပျက်သည်ကား မြန်မာလူမျိုး တို့နှင့် မှန်
တလိုင်း လူမျိုး တို့၏တိုက်ခိုက်မှုပင်ဖြစ် လေရာ၊ ဤကာလတွင်ဂှမ်း လူမျိုး တို့သည်မည်သို့
သော ခြေလှမ်း ကိုလှမ်း သဲဖြည့်တိုက်မှတ်ယူထိုက် လေသည်။ မြန်မာ - ဂှမ်း - မှန်တလိုင်း
- ဤလူမျိုး သုံး မျိုး သည်အချင်း ချင်း တိုက် ခိုက်စစ်ဖြိုခွဲရာ ၎င်း အကြောင်း ရင်း
ကိုဆို သော်ဩဇာအာဏာ သဲတွင်ရန်အတွက်ဖြစ် သော်လည်း ဟိုဦးအရေး ကြီး သော အ
ကြောင်း ရင်း မှာမြန်မာ နိုင်ငံ တော်ကိုစည်ပင်သာယာ စေရန်အဓိကအချက်ဖြစ်
သောစီးပွားရေး အတွက် ကြောင့်ပင်ဖြစ်သည်ဟုစဉ်း စား ဆင်ခြင်သင့်ပေသည်။

ဤခေတ်အခါ၌ ဗုဒ္ဓဘာသာသာယာသနာ၏ထွန်း ကား မှုသည်၎င်း ၊ စေတီပုထိုး များ
တည်ဆောက် မှု သည်၎င်း ၊ များ စွာထွန်း မြောက်သည့်အခြေအနေ ရောက်ရှိသေး
ချေ။ သို့သော်လည်း ဖျံ့တချာလက်စာစာကြီး ပေကြီး လောကမှာအာဂုဏ်တက်စ
ချိန်ဖြစ်သည်ဟုဆိုနိုင် ပေသည်။ ဤခေတ်စားပေနှင့်ပတ်သက်၍ နောက်နောင် ဇေးသား
ရမည် "အင်း ဝ ခေတ် (၂) " တွဲတွင်အကျယ်ဖော်ပြ မည်ဟုကြံ့ခွယ်ပေသည်။ ထို့ ရာလေး
ဖြစ်သောနတ်ကိုး ကွယ်ခြင်း သည်ကား ဤခေတ်၌ပင်အဖြစ် နက်ခွဲမြဲပင်ဖြစ် လေသည်။

ဤခေတ်၌ထင်ရှား စွာပေလောမည့်လူစွမ်း ကောင်း များ ကား သတိုး မင်း
မျှား ၊ မင်း ကြီး စွာစေတီ ၊ မင်း ဆွေတို့အင်း ဝ မင်း ဆက်သုံး ပါး မှစ၍ ရာဇာ
ဓိရသာ ၊ ဝန်စင်း စိုး ရာဇာ ၊ သီလဝတီတို့လည်း မှတ်သား သင့်လျော် ပေသည်။

まえがき

前号の「ピンヤ・サガイン時代」より引続き「インワ時代」について述べる。インワ時代は、ビルマ族が前時代のピンヤ・サガイン両王家のシャン族の支配から脱して、彼ら自身の文化を築かんとする時代であって、その最も重大な事件はビルマ族対モン・タライン族との闘争であるが、その間シャン族の動きも見のがせないものがある。従って、ビルマ——シャン——モン・タラインの3民族が互いに抗争し合うが、その直接の動機は権力の拡大にあるけれども、より重大な理由は経済的原因にあると見るのが、妥当ではあるまいか。

この時代には仏教の発達、パゴダの建立等は著しいものはないが、文学の黎明期とも云うべく、殊に詩歌の発達がやや見られるのである。この事に関しては「インワ時代（その三）」に述べる積りである。ナツ信仰は依然として根強い感がある。

この時代に現われる人物としては、タドーミンビヤー、ミンデーゾワソーゲ、ミンソエの3代に渡るビルマ王がその主役を演ずるが、モン族の王ヤーザーダリ、ミンデーゾワ王の大臣ポーヤーザー、ヤメディンの太守ティラワ等にも注目すべきであろう。

西暦1365年タバウンの月（日本の3月頃）に、タドーミンビヤーはイラワデ河、ドッターワディ河（通例ミンゲ河と呼ばれている）、パンラウン河、サモン河、ゾージー河等の合流地点にアヴァの湿地帯を埋め立てて都を建設し、そこに王宮を営んだ。その後、約400年間ビルマ人はアヴァを彼らの都とし、イギリス人は近世に至るまでビルマを「アヴァ」と呼び、また、シャン族にはビルマ王は「アヴァの黄金宮の王」として知られていた。「元史」の「阿瓦」は「アヴァ」を以て「ビルマ」の同義語として用いられたものである。

それら5つの河の合流点に建設されたことよりAwa（河の口）→Avaと名付けられ、また、それらの河の合流点にあったンガチン(Ngakyi-in:), チャウモーイン(Kyaukmaw-in:), インブーイン(In: bhū-in:), オンネイン(On: hnè-in:)という4つの“in:”（池）を埋立てて建設されたので、インワ(In:wa=池の口)とも名付けられた。ビルマ人のうちにはインワの名称を用いる人が多いので、私も以後インワと呼ぶことにする。

前号にて既述したサガイン王朝と新しく興ったインワ王朝との血族関係を表に示せば、次の通りである。

一頭の白象王ティハトウ (シャン族, ピンヤ王朝を創設す)	+	ヤタナーボン女王 (ビルマ族, リンイン村出身の娘)
アティンカヤー・ソーユン ($\frac{1}{2}$ シャン族, サガイン王家初代)	+	(パガン王家の) チャーゾワ王の娘 (ビルマ族)
	↓	
	+	ソーミンコードーデー (娘) ($\frac{1}{4}$ シャン族)
	+	タドーシンティン (ビルマ族, タガウン 王家に属す)
	↓	
	+	ヤーフラー (即ち, タドーミンビヤー) ($\frac{1}{8}$ シャン族, インワ王朝を創設す)

このインワが吉兆の地と定められた事について Hman-nan : Yāzawin には次のように述べられている。

タドーミンビャーが都を建てていた時、仮の宮廷としていた住み家に蘆を巻いたほどもある大蛇がその家の柱に地面の下からどくろを巻いていた。その蛇が動き始めるとその家中がゆらゆらと揺れるので、地面を掘らせてみると、大蛇が見つかった。そこで、パントウザー・タンガヤザー (Pan : htū : gyī : -Thangayāzā) という占師にその兆候を調べさせたところ、それは、国が平和に栄え、宗教が盛んになり、国民は幸福な生活を送るようになるであろうという兆が表われていると云った。そこで蛇に食物をあたえて安全な場所へ放してやった。(Hman-nan: Yāzawin Vol. I. p. 434—5)

政治経済面から見て、インワをビルマの都として決定する条件としてあげられることは、先づ、食糧を確保するに適した地であること。米倉地帯といわれるチャウセ地域より産出される穀物を始めとする農作物を運搬するのに便利な土地であって、ミンゲ河によってインワの地へ容易に運ぶことができる。次に、国の中心部に位置していることであって、インワの地がイラワヂ河岸沿いに位置していて、上ビルマ及び下ビルマへ、また、シャン州へ容易に通じることができ、実にそこは国の中心をなしていることである。

今やその領土は北へはシュエボー及びモンユワ、南はプローム及びタウングー、東はチャウセよりヤメディン、西はパコック、ミンブー、タイエツミョー及び西側の山脈の麓に至る地域までそれぞれ拡まっていた。しかし、タウンドウインダー、ヤメディン、サガイン等の支配者たちはしばしば反乱の気配を示していた。

都の建設が終了した頃、タドーミンビャー王はパガンに軍を進めたところ、パガンの王ソーモンニツ (学報18号, 76頁参照) はタドーミンビャーに忠誠を誓った。

タドーミンビャーの性格

以下に述べる事柄より察せられる通り、タドーミンビャー王の性格については、彼は勇気を尊び、彼自身勇敢であり、りっぱな男らしい風貌の持主であったというが、一方また、残忍な性格のところもあった。仏法僧(*Yatanā-thon : bā :) を唱えず、僧侶を敬まわなかったことから宗教排斥者であるとして非難の声もある。

*Yatanā-thon : bā : とは「三つの宝」即ち、Hpāyā : , Tayā : , Thinghā (仏法僧) を指すのであってビルマの仏教徒は折にふれ、これをパリー語にて繰返す、即ち、"Buddhan tharanan gacchāmi" (我仏陀に帰依す), Dhamman tharanan gacchāmi (我法に帰依す), Thanghan tharanan gacchāmi (我僧に帰依す) を唱える、この礼拝を Tharanagun という。

1365年に、ンガヌエゴン (Nganwegun:) (現在の Lewē:) の太守バヤチョートウ (Bhayakya-wthū) が謀叛を起したので、タドーミンビャーは彼を捕縛して殺し、その死体の胸腔を皿として食事した。家来たちがそれを見て、ひどく恐れた、ということがビルマ人史家の記述のなかにも

ある。

また、かつて1人の菓子売り女がある僧侶を信じて彼に彼女の貯えたお金を預けたところ、その僧侶は彼女のお金を隠して返さなかった。その事を聞き知った王は自身でそれを調べ、その墮落僧侶を宮廷の床下につき落として処刑したということである。

それよりしばらくして、サガインのイエウオンヤットの盗賊ンガテッピー (Ngatekpyā:) を王は策略によって逮捕した時、王は、「汝を処刑するのに剣、槍、斧、杭のうちで汝はどれを望むか」と尋ねたところ、ンガテッピーは答えて、「お前が捕えた者だ。好きなように殺せ。俺のほしいものは剣や槍ではなく、お前の妃ソーウンマ女王だ。」と大胆に言った。王は少しも腹を立てず、「こんな不敵な奴は殺したくない。」と云ってンガテッピーを許し、味方に引き入れた。後、1366年タウンドウインのティハパテ (Thihapate) が反乱を起した時、ンガテッピーを将軍に任じ、鎮圧させた。(U Hpō:Kyā:, p. 121—122)

タドーミンビャーの最後

1367年、サグーの太守テインガトウ (Theingathū) がインワに対し反乱を起すこと二度に及んだので、タドーミンビャー王はそれを鎮圧しに行ったが、テインガトウは頑強に抵抗したので王は街を取囲んだ。折しも、その地方に天然痘が発生して、王はそれにかかり、直ちにインワへの帰国の途につかねばならなかった。スエチョーの川岸に達した時、病気が重くなり、死の近づいたことを感じた王は、宮廷に残してきた王妃ソーウンマのことを思い出し、護衛隊長であるンガヌ (Nganu) に「もし自分が亡くなって、ソーウンマ女王を他の者が取ろうとするならば、汝が彼を殺害せよ」と云い残した。ンガヌは宮廷へ帰り、ソーウンマにそのことを伝えたところが、彼女は直ちに憂心し、ンガヌと情を通じ、一カ月半ほど宮廷にて過ごした後、二人はサガインへ走り、ンガヌはサガインを支配した。タドーミンビャーはンガヌが逃亡してからやがて、25才の若さでこの世を去った。彼の統治は僅か4年足らずで終わった。

タドーミンビャー王には子供がなかったので、大臣高官たちは会議を開き、相談した結果、ヤメディンの太守ティラワ (Thilawa) にインワの支配を乞うたが、彼は王位に即く器ではないと云って拒絶した。Sagā:bon Wutthu Pon Pyin myā:によれば、ティラワは無口な人であって、「私は一日に言葉を三言も十分に話せない者なので、王にはなりたくない。」と云って断わった、ということである。(ティラワについては後述する) そこで、タドーミンビャー王の妃ソーウンマの兄に当るアミン (Amyin) の太守タヤービャー・ソーゲ (Tayā byā: Saw gè) を指名して王位に即けた。彼は智恵と勇気を具えたインワの支配者として適任者と見なされた。

タヤービャー・ソーゲは自分がインワの王位に即くなどとは全く夢にも思っていなかったので、彼は “ ဘုရားနဲ့ ငါတို့အတွက် ဖွဲ့စည်း ” (その積りではなかったのに王になってしまった。) と言ったが、その言葉はその当時より現在に至るまで、「まぐれ当り」または、「棚からぼた

餅」の意味の諺として用いられている。

ミンダーゾワ・ソーケ (Min : gyi : zwā-Sawkè) (1368—1401)

タヤービャー・ソーゲはパガン王家のチョーゾア王の孫に当り、ミンダーゾワ・ソーケの称号によって王位に即いた。そして、ヤメディンの太守ティラワの妹カメーミ (Hkamē:mi) を南殿の女王に、また義兄タドーミンビャー王の妹であるシンソーダー (Shinsawgyi:), *ソーウンマ (Saw ummā), ソートーウ (Saw htaw ū:) の3人をそれぞれ北殿, 中殿, 西殿の女王に任じた。

ミンダーゾワ・ソーケ王はサガインを支配しているンガヌの所へンガヌの兄ヤーザティンジャン・ンガマウ (Yāzathingyan-Ngamauk) にその弟ンガヌを逮捕しに行かせた。ウ・ボチャーによれば、王は、「もし成功すれば、*ソーウンマ女王と、タウンビヨンヂー及びワーインドゥ両地区をあたえよう。」とンガマウに約束した。ンガマウは船にてサガインに渡り、弟に会って、「わしは自分の弟がサガインの支配者になったことをうれしく思う。それでここへやってきたのだ。ところで、わしは身体の工合があまりよくないので、お前はわしの船の所へ供の者を連れず一人で来てほしい。」と云って、弟を連れ出した。ンガヌは兄の言葉を信じて、船の所まで来た時、船が動き出して彼をインワへ運んで行った。兄は「王家に属さないお前が支配者になることは望ましいことではない。」と云って、弟を監禁した。しばらくして、ンガヌは逃げ、ラーフー〔現在ではミヤタウンと呼んでいる〕地方へ行って身を隠した。

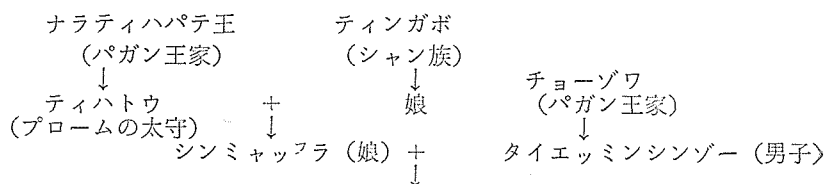
ミンダーゾワ・ソーケ王は約束通り、ヤーザティンジャン・ンガマウにソーウンマをあたえた。

*ここでソーウンマが2人いることに注意しなければならない。1人はパガン王朝を廃位されたチョーゾワ王の息子タイエッミンシンゾーの娘として生れ、幼少の頃の名をウンマ・ダンティーと云った。ミンダーゾワ・ソーケの妹であり、ピンヤ王家のチョーゾワ王、その弟ナラトウ、ウザナーピャウン、インワ初代のタドーミンビャー王と4代の王の妃となり、最後にはンガヌ、それからヤーザティンジャン・ンガマウと結婚した。従って、6人の妻になった訳である。通例“ピンヤ・ソーウンマ”と呼ばれている。

もう1人のソーウンマはサガイン王家の娘で、タドーミンビャー王のまん中の妹で、ミンダーゾワ・ソーケ王の妃で、通例“サガイン・ソーウンマ”と呼ばれている。

ミンダーゾワ・ソーケ王の血統

ミンダーゾワ・ソーケ王はパガン王家のナラティハパテ王の流れをくみ、ナラティハパテ王の末子でプロームの太守をしていたティハトウ (学報18号72頁) とシャン族の出であったティンガボの娘 (学報18号74頁) との間に娘シンミャップラ (Shin Myat Hla) が生れた。シンミャップラはパガン王家チョーゾワの息子タイエッミンシンゾーと結婚して、3人の男子を生み、その中の末子がタヤービャー・ソーゲ即ち、ミンダーゾワ・ソーケ王である。図示すれば、



- (1)ミンザインミン、(2)ピーソーヤンナウン、(3)タヤービャー・ソーゲ
(即ち、ミンダーゾワ・ソーケ王)

従って、ミンダーゾワ・ソーケ王にもシャン族の血が幾分か含まれている。彼は両種族の要求を調和してゆこうと努力したのであろうが、ビルマ人よりもむしろシャン族にその同情が傾いていたようである。

その頃、ヤメディンを妹ソーパレの夫君ティラワが、プロームを兄ソーヤンナウ、サクーを妹ソーミャットの夫君ティンガトウ・ソーナウン、タガウンをンガナウサン、タウンゲーをピヤンチーデー、タウンドウインデーをティハパテ、パガンをシートウ、パカンデーをタヤービャー、パウミャインをミンパレーがそれぞれ支配した。

ウォンジン・ポーヤーザー (Wonzin : Hpō : yāzā)

ミンダーゾワソーケ王はチャウセにジドー水門を築き、またメッティラ湖の堤防を修築した。その工事の監督中、地面を掘っていた時いくつかの黄金の像が見つかった。王はそこから程近いウォンジン村で一人の若者にその像について尋ねたところ、彼は王に詳細に説明することができた。その若者の説明の内容は、フマンナンヤーザウイン I (446頁―7頁)によれば、その昔、アラウンシートウ王が巡狩の旅に出ていた時のことである。アラウンシートウ王はタイ国リンジンの王の一族を拉致してメッティラまで連れて来たが、このメッティラの地にて果てた王子王女たちを後の世の人々に偲ばせるために黄金で彼らの似像を造らせて埋めておいたものである、いうことである。

王は彼の深い学識に感じ入って、彼を宮廷に招聘し、王の相談役として仕えさせた。この若者こそ後日賢臣の名を謳われたウォンジン・ポーヤーザーで、彼はミンダーゾワソーケ王、その子シンピューシン (Hsinhpyūshin)、その弟ミンガウン (Min : gaung :) の3代の王に学問を教え、国のために尽した。彼はまたズイータビツ (Zi : tabyit) という名でも知られているが、それは彼が相談役として取立てられた時、王によって与えられた称号である。

彼は1422年功成り名遂げて天寿を全うした。この智者に関する逸話はビルマ偉人伝の中の一人としてビルマ人の家庭で広く読まれている。

インワは南部一帯の動きに注目しながら、シャン諸州からの攻撃にも備えなければならなかった。また、シャンの土候たちも彼ら同士の紛争のためにインワを味方に引き入れようとするこゝもあった。

1370年北部シャン州のカレーとモーラニンは互いに争っていたが、両方の町よりミンダーゾワソーケ王の元に援けを求めて来た。そこでポーヤーザーは次の譬え話をした。二羽の鶏が闘っているのを見ていて、遂には二羽共疲労してへとへとなる。それを待っていれば、容易に二羽とも捕えることができる、即ち、
“ ” ယ ဘျက်၍ ဣ၍ ပန်း မှတမ်း ယောထုံး ” (きんまを噛みくだいたように闘鶏がへとへとに疲れて了えば捕まえ易いという譬え) と言った智者ウォ

ンジンボーヤーザーの言葉は有名である。彼の忠告に従って王は二つの町を一挙に占領してそれぞれの地域に太守を置いた。

ミンスエ (Min:hswe)

カレーとモーニン进行を征服した後、王はシャン族チェイン・カンデー(Kyein:Hkan:gyi:)をモーニンの太守として置いたが、彼は1371年謀叛を起したので、ボーヤーザーがそれを鎮めた。その翌年1372年に再び反乱を起し、ミエドウを侵したので、今度はミンダーゾワソーケ王自身が軍を進めた。その折、途中カズンネイン村に立寄った際、王は村の若者と結婚を目前にひかえたミベザー(Mibhezā)という娘を手に入れ、その村に半月ほど滞在した後、モーニンに進軍した。モーニンを鎮圧して、再びカズンネイン村に帰って来た時、ミベザーが懐妊していることを知り、もし男子が生れたならば、この指環をもって自分の元へ訪ねて来るようにと言い残して、彼女に指環を与え首都に引上げた。このことはパガン時代におけるチャンジッターとタンブーラとの場合を想起させる。

ところが、その年、男の子が生れたので、王との約束に従い、指環をもって彼女は王を訪れた。そしてその子をミンスエと呼んだ。このミンスエが後のミンガウン王(Min:gaung min:), 即ち、パタマ(第一)ミンガウン、または、ミンガウン大王として知られている有名な王となるのである。その後、ミベザーは息子シンティダッ(Shin Thiddhat)と娘シンミャップラ(Shin Myat-hla)をも生んだ。

ミンソエの幼少時代

ミンソエは王子として生れながら、その幼少時代には、異腹の兄タヤービャー(Tayābyā:) (後述する)との関係上、かなり苦難の道を歩んだことが察せられる。ウ・ボチャの記するところによれば、父王ミンダーゾワソーケは彼とミベザーとの間に生れたミンソエとその弟シンティダッの兄弟について、異腹の長男タヤービャーが王位に即いたら、二人をいぢめるのであろうと推察して、幼い時には目立たないようにして置こうとして、付添いのンガキンニョー(Nga-hk-innyo)とンガキンバ(Nga-hkinbha)の二人に兄弟を預けて、トンドンプーテッ、タウンドウイン、チャウサイッ、バティン、ンガベ等へ旅に出した。旅中、兄弟は大そう悩み苦しんだ。付添いの者たちもナッ祭などにはラッパや太鼓を鳴らして、儲けたお金で王子二人を養った、……という事情からも察せられる通り、ミンダーゾワ王は二人の苦勞を知っていたので彼らの身に同情していたらしく、ちょうど、サガイン王家の初代王アティンカヤー・ソーユンとピンヤ王家のウザナー及びチョーゾワとの関係について彼らの父ティハトウ王がいただいていた(学報20号5頁参照)と同じような心づかいではなかっただろうかと思われる。

やがて、父王は二人の息子を余りにも不憐れと思って連れ戻させ、ピンレミョーのタンガヤーザ

一師僧 (Thanghayāzā) の元にて学問を修めさせた。時にミンソエは 9 才で、シンティダッは 7 才であった。

このようにして、ミンソエが 12 才になったある夜のこと、彼は夢を見た。その夢の中で彼の腸がとび出し、インワの都を取りまいた。(パガン時代にサレーンガコエが見た夢と同じ、(学報 12 号 106 頁) ミンソエは大いに驚ろき、また、恐れて、その夜のうちに、師僧を起こして、その夢のことを話した。師僧はそれを聞いて、直ちに立ち上り、ミンソエを足で蹴り、大の字に倒した。ミンソエは、「先生、余りに非道でございます。」と云った。すると、師は、「私も修道僧であった時、私のかぶっていた冠物が風に吹飛ばされて地面に落ちたのを私はうっかり踏んでしまった。その時、私は自分が将来王の師になるであろうと私自身でその徴候を読み取り、“我若し王の師になれば、橋を建造しよう” と固く心に決めた。やがては、汝の夢が実現して、本当に王になるであろう。王になったら、私を忘れないように汝を蹴りとばしたのである」と云った。ミンソエは大そう喜び勇気をふるい起した。その後、時を経て、ミンソエが王になった時、師僧も王の師となり、望み通り橋を建造した。

アラカンとの関係

1373 年、アラカンの王ミンビルー (Min: bilū:) がこの世を去って、アラカン国は動揺していた。大臣たちは相談した結果、ミンヂーゾワソーケ王の元にアラカンの王位を継ぐ者を求めることにした。王はその求めに応じて、ボーヤーザーを始め賢臣たちを集めて協議し、王の叔父に当るソーモンヂー (Sawmwongyi:) をアラカン国の王位に即けた。彼は公正と寛仁とを以てアラカンの民を治めたので、アラカン人たちは大いに喜び彼を徳とした。国は豊かで平和であった。ところが、1380 年、ソーモンヂーが死亡したのでアラカン国より再び王位を継ぐ者を要請してきたので、ミンヂーゾワソーケ王は賢臣たちと相談して計り、彼の家来である余り利口でない *ソーメ (Sawmi:) をアラカン王として送ることにした。ソーメに向って王は次の比喻を用いて話している。“” ဝ န်း စေ့ဝ န်း ပင်ကွဲပကျင့်နှင်း၊ ညောင်စေ့ညောင်ပင်ပင်ကွဲသိုကျင့်။” (棕櫚の種子や樹の如く為さず、バンヤンの種子や樹の如く為せ。) また、ボーヤーザーも、“” ညောင်နှင်းညောင်ကိုဆုံး ပြုကျင့်။” (猫やバンヤン樹[ニャウンを猫の鳴き声]に擬えて為せ。) と訓した。(上述の比喻をウ・ボチャは、「種子は大きいけれども樹は小さく人が身をかきまうことのできない棕櫚の樹。種子は小さいけれども樹は大きく、人が身をかきまうことのできるバンヤン樹。また、隠している爪をいざという時には現わすところの猫。」と説明している。)

*ハーヴィでは王の息子と記されている。

ところが、ソーメはその比喻の意味を理解するに足るだけの智恵がなく、アラカン国に達した時、彼は都の方々に生えていたバンヤン樹を切り倒し、それらを象の餌に供したに過ぎなかった。また、寺院や森、人家等にいる猫を捕えて殺した。とフマンナンヤーザウインに記されている。(Vol.

I, p. 457) ソーメは仏教を重んぜず、アラカン国民の願望に副う治世を行なうことができなかったため、アラカン国は動揺したので、ソーメはその国より逃げてサクーの町へ走らねばならなかった。アラカンは反乱を起し、ビルマの支配を脱して、以前退位したアラカン国王の孫チョーゾワ (Kyawzwā) を位に即けた。

ヤカイン・サヤードー (Yahkaing Hsayādaw)

当時、占星術による一種の魔除けを人々が大いに信じていたことがウ・ボチャの「ビルマ史」に述べられているが、フマンナンヤーザウインの記述より得たものであろう。ビルマでは、古い時代より Yatrā というものが行なわれていて、Judson の辞書では、“certain magical observances” と訳されているが、それを行なうのは占星術師によって予示された危険を避けるために行なうのである。

ミンヂーゾワソーケ王が幼なかった頃は国内が不隠であり、アラカン国で師僧ヤカイン・サヤードーの元に寄寓していたことがあった。師はその子供が将来王になる素質をもっていることを見抜いていた。そして、「もしお前が王になれば、私のことを忘れるな」と言いかせたことがあった。

今やミンヂーゾワソーケは王となって、16年目 (フマンナンヤーザウインでは6年目となっている, p.458), 1383年に、師僧サヤードーはアラカンより王の元に使を送って、「汝は王になって、わしのことを忘れていてのではないか。大いなる功德を積み、長命を望むならば、都の西南隅の地にジーゴン・パゴダ (Zi: gon-hpāyā:) を建立せよ」と指示した。大王は師の言葉を信じて、指示された場所にパゴダを建てるべく着手した。その工事はミン・ッゲー河の東側より土を手から手へ運んで地を埋めなければならなかった。人々はその労働に苦しみ、その地を今日に至るまで“プーイン” (pūin:=熱い池) と呼んでいる。このようにして、ジーゴン・パゴダは完成された。1383年であった。その時、インワの人々は都をあげて不吉の兆候を恐れおののいて仰天した、ということである。そのことをヤカイン・サヤードーが聞いた時、「自分は僧侶の身であって、月曜日の生れである。従って、月曜生誕日の眷属 (Parivāra) の地である都の東の方角にコッゴー樹 (=アカシア科の *Albizzia lebbek*) を植え、そして、西南隅の場所に象の囲いを造るように」とつけ加えて指示したので、王は彼の言葉通りに行なった。そのようにして、はじめて人々の恐怖は消え去った。ミンヂーゾワソーケ王は師僧に多くの供養をなし、Mahā Thingayāzā という称号を贈った。

上述のように、不安な場所を避けて、他のよりよい場所を選ぶことによって悪霊を払うことを “Yatrā hkye di” というのである。That-pon-Abhidhān, p. 555に “ယတြာ ချေသနာ = ဝေဒနာ ဇီဝနောရတံ ဖွဲ့ ဖြေတံ: ခြင်း: စသောတရား: ချေခြင်း တို့ခေတိ။” と説明されている。この事は占星術がビルマにおいて大いに信じられていたことを示しており、注目すべきである。ここにおいてもビルマ人のナッ信仰の影響による軽信性がうかがわれる。

ジンメ及びタウンゲーとの関係

ウ・オンマウンによれば、1374年インワの王はジンメを攻めようと計画を進めていたところ、軍を進めないうちにジンメの王妃たちが投降して来たので、平和のうちに勝利を収めた。また、ウ・ボチャの記するところでは、ジンメは大臣たちに王の娘と共に象馬をインワへ献上して来させた。

1376年、インワは再びタウンゲーにも軍を進めて、攻め落とそうとしていたが、ミンダーゾワソーケ王の兄のプロームの太守であったソーヤンナウン (Saw Yan Naung) をつかわして、プロームの町近くナウインチャウン附近にてソーヤンナウンはタウンゲーの太守ピャンチー (Pyan hkyi) を策略によって征服した。

インワとハンタワディの友好関係

ハンタワディ王国を支配していた白象主ビニャーウー (Binyā:ū) 王とインワのミンダーゾワソーケ王とは友好関係に入っていた。1370年、両国の王は日を定めて国境にて会見することを約束した。3カ月後、定められた日に、その2人の王は軍勢をひきいて、インワ-ハンタワディ国境で会い、心から清い気持で誓いをなし、両国の国境線を定めた。そして、共に宴を催うして、互いに贈物を交換してから、それぞれの都へ帰って行った。

この友好関係はモン族とビルマ族の間では初めてのものであり、16年間続いたことは実に不思議というほかはない。しかし、所詮相容れない両民族の交友関係は表面的なものに過ぎず、やがてその兆が現われ始めるのである。一人の王から他の王へ時代が移るに従って、両民族間に不和が募ってゆき、やがては両民族の戦いへと発展して行った。そして、遂にはずっと下って1751年に即位したアラウンミンタヤー・ウ・アウンゼヤ (Alaung: min: tayā: -Uaung zeya) の時代に到るまでの約400年間に渡る戦いに到ることを知るべきである。しかし、その間戦ったり休止したりする状態が続いた。

モン族対ビルマ族の戦いの原因

その戦いの原因をさぐるならば、中傷と傲慢によるものであるが、政治的、経済的な直接原因として次の事があげられるであろう。

その昔、パガン王朝がビルマを支配していた頃、モン・タライン族の国であるハンタワディはビルマの属国であったが、その後、漸次勢力を得るに及んで、ビルマの町々や村落を侵し、それ

がビルマ王の悩みとなっていた。(ウ・ミンハン「ビルマ史」179頁)

1383年、ハンタワディ国王ビニャーウが死し、その子ヤーザーダリがハンタワディ国の王位に即いた。それより3年を経て、即ち、1386年に彼の叔父に当るミヤウンミヤの太守であったラウピャ (Lauk-hpyā:) はヤーザーダリを亡きものにせんと欲して、インワのミンダーゾワソーケ王に、「ハンタワディ国は今勢力がそれほど強固ではない。戦い取るのは今です。私もバセインやミヤウンミヤの軍勢を引いて加勢しましょう。そして、もし勝てば良象良馬金銀財宝は大王の思うがままになります。私はただその税だけをいただければ、よろしい。」と書簡で伝えてきた。これが端緒となって戦いが始まるのである。

ミンダーゾワソーケ王にとってはモン・タライン族を撃つべき千載一遇の好機会であると思っただけに違いない。ビルマ族にとってどうしてもモン・タライン族を撃たねばならない重大な理由があった。それは次の事情より推察される。パガン時代に遡るが、ビルマの北部及び東部を占める山岳地帯を根拠としたシャン族は不毛な土地のため生活に困窮し、ビルマ族の住むイラワヂ河に沿った中部地帯に移動する気配のあることを予知したアノーヤター王は彼らのビルマ本土への侵入を防ぐためシャン・緬国境近くに43の前哨地点を置いたことは学報16号51頁において述べたところである。先見の明のあったアノーヤター王はこのようなシャン族の流布に対し先手をうったけれども、パガン朝の末期に近い頃には、土地の肥沃なイラワヂ河沿いの中部地帯へシャン族が次第に移動し、定着するようになった。かくて豊かに暮すようになった彼らは次第に勢力を増強してきた時、ビルマ王家をも脅やかし、遂にはその政權をも手中におさめるに至った。それがピンヤ及びサガイン王朝の勃興であり、その後、インワ王朝が興ったけれども、依然としてシャン族は多数定着して、勢力を保持していたのでイラワヂ河沿いの中部地帯に以前より住んでいたビルマ族と共にシャン族も生活したので土地が狭くなり、人口が増加して生活が苦しくなった。このようにして、シャン族がビルマの地に溢れるようになってきた時、シャン系ビルマ人も純ビルマ人も豊かなモン・タライン族の住む地域、即ち、三角州地帯に目を転じることは当然であった。ひるがえってビルマの地を眺れば、東にはシャン高原があり、北は山岳地帯に取囲まれ、西も山脈によって進行を遮断されている。このような地形で三方の側へは進むことができないビルマ族にとっては開かれている所はモン・タライン族の住む地域だけであり、そのためにも肥沃な三角州地帯を望むビルマ王は、モン・タライン族の王とは不仲であったミヤウンミヤの太守ラウピャーの如き人物が援助しようと言え、どうしてタライン国に攻め入ることを躊躇しようか。

モン対ビルマ第一次戦役

ミンダーゾワソーケ王は快くラウピャーに同意し、この機会にタライン族を打とうと計画した。そして、18才の若者であった太子タヤービャー (Tayā byā :) に9個部隊を引きいて、タウング

ーから進ませ、また、いまだ14才の息子でピンズイの太守であるミンソエにも9個部隊を引きいて、イラワヂ河沿いにターヤーワディを経て攻めさせた。太子はペグーの北側のパンチョーの町を占領し、弟のミンソエはフラインミョーを落し入れた。フラインミョーから再びモービーを攻めたが、成功せず後退せねばならなかった。その後、ミヤウンミヤの軍と結合して、ダゴン（現在のラングーン）を攻め、兄弟二人が一緒になって進んだ時、ヤーザーダリはペグーからパンチョーへ進んだので、兄弟の軍はヤーザーダリの軍に向って戦いを挑んだ。そこでヤーザーダリは反撃に出た。折しも雨期に入ろうとしていた時期でもあり、ラウピャーからの援軍も来なかったので、ビルマ軍は利あらず、兄弟の軍は雨期の終るのを待つため一たび引きあげた。

ウ・ミンハンの「ビルマ史」では、ビルマ軍の士気盛んな様子が次のように述べられている。「この戦闘において、ヤーザーダリは彼が乗っていた象の尾が切りとられ、タライン族の兵士も多数戦死した。そしてタライン族が軍を整備して再び攻めてくるのを迎え撃とうとするミンソエを制して、兄の太子は時期を待つようにと血気にはやる弟を引き留めたが、彼は、「われわれはインワから何の為にこの地へ来たのか。タライン族の王が出て来ないのが心配だ。出て来るよう神に祈る。これ以上はもう待てない。」と云って、部隊がまだ揃っていない内に川を渡って戦った。」

その後2カ月を経て、ウ・ボチャの「ビルマ史」によれば、ヤーザーダリは次の意味の手紙をミンデーゾワソーケ王に贈物と共に送ってきた。「私の叔父ラウピャーの中傷によって国民は被害を蒙りました。ラウピャーは私の父ビニャーウの存命中よりすでに忠実性を欠き、反乱の気配を示していました。私も彼に対して謀叛の計だてをもっています。私は必らず叔父ラウピャーを亡ぼします。あなた（ヤーザーダリがミンデーゾワソーケに「父の兄」を意味する“Bhagyi : daw”と呼び掛けている点に注意すべきである。）は私の父王に対してもっておられたと同じ友情を私に対しても示していただきたい。」

次に、ヤーザーダリが太子とミンソエに与えた手紙の中で、「あなた方2人が私の国に来られたが、すぐにお帰りになったので、客として十分にもてなさず、また何の贈物もできなくてお気の毒です。」と言って、手紙と共に、黄金の船、黄金の筒状の箱、金魚、金色のえび等の彫り物や衣服、香料などを送ってきた。この2人の兄弟に与えた手紙に書かれてあった言葉には普通の言葉ではなく、戦いに敗れて逃げ帰った者を嘲笑する意味が含まれていた。また、それらの贈物も子供だましの人形に過ぎず、若年の兄弟2人の戦略の無能をあざけたものであった。この手紙の内容を知ったミンデーゾワソーケ王は“" ထေဝ်း ဝဉ်မနုၤ၊ ဣဝဉ်မနုၤ "”（わが子の身が粉碎されることは悲しまないが、傷つけられたことが残念だ。）と言わんばかりに2人が引きあげてきた事（ヤーザーダリは敗北と呼んだ）をヤーザーダリにののしられたことがくやしい、とハンタワディ国の使者の前で云った。

その後、2次3次と戦いを繰り返し、その勝敗がつかないままにしばらく休戦に入ってしまった。

モン対ビルマ第二次戦役

翌1387年、ミヤウンミヤの太守ラウピャーはミンダーゾワソーケ王に、「この前、兄弟お2人がハンタワディに軍を進められた時、私が到達するまでに、2人は帰国されたため援助することができませんでした。今度は私自身が兵をひきいて、ずんずんペゲーまで軍を進めましょう。」と言ってきた。そのことを聞いて、王は太子に陸部隊を指揮させ、ミンダーゾワ王自身は水路軍を指揮してハンタワディに向った。弟のミンソエは父王の代理として都を守った。彼らはフライン、ダゴン、ダラ、モービー、パンチョー等の町々にて戦ったが、ラウピャーは援助に来なかった。彼らは実によく戦ったけれども勝敗がつかず、ハンタワディの泥沼の多い所ではビルマ軍に利あらず、その上、砂ばえ、蚊、赤ばえなどが実に多く、熱病が発生した。折しも雨期が近づいたためビルマ軍は再び引き返すことを余儀なくされた。

*ミンダーゾワ王は海へ通ずるイラワヂ水路を制しようとして着眼していた。（“ミンダーゾワソーケ王”は長すぎるため“ミンダーゾワ王”（Hall “Burma” p. 30）と略して書くことにする。）

モン対ビルマ第三次戦役

1390年、ビルマ側に属するグートツの町をモン・タライン王ヤーザーダリが戦い取ったことを聞いて、ミンダーゾワ王は太子タヤーピャーとミンソエに陸路よりタウンゲーを経て軍を進ませ、王は水路より部隊を指揮して、ハンタワディ国に接しているグートツに向った。彼らは数度にわたってグートツを攻めたけれどもモン・タライン軍の守りが強固であったため、どうしても攻め落すことは困難であった。その時、ヤーザーダリは軍勢をひきいて、パンチョーに立てこもった。このパンチョーにおいてヤーザーダリとミンダーゾワ王の同盟軍は死力を尽して戦ったが、勝敗はつかなかった。しかし遂にモン軍の将軍よりアルエとグートツの町をビルマ側へ返して戦争を終結してはどうかという旨を伝えてきた。ミンダーゾワ王も町々を返してもらえば、故郷へ引きあげるであろう、と答えたので、両国の捕虜をそれぞれ交換して、自分の国へ引きあげた。

ビルマにおける民族的圧迫の波動は大体において北から南へ方向がとられているが、タライン年代記にはシャン族の侵入として記されている。それはこの場合、ビルマ軍には同盟者としてモーニン、カレー、ヤウンホエ等のシャン族の軍勢も加わっていたことを意味するのであろう。ビルマ軍のモン族に対する攻撃は数年毎に繰返された。彼らはモービ、ダラ、ダゴン等の町々を包囲しては、雨期になれば戦争を中止して都へ引きあげて行った。

英人史家の記録では、この戦いは今日の用語の意味におけるような正規の戦争ではない。首狩り、密林の伏兵、柵を境としての攻防戦、時にはデルタ地帯一帯に渡る大規模な包囲戦も行なわれた。また、奴隷の掠奪もあった。これが当時の戦争であって、敵兵の捕虜のうちで殺されない者は占領部落の住民たちと共に上ビルマに連れ去られ奴隷として使役された。（Outline of Bur-

mese History by Harvey, p. 62) ペグーは遂に完全に陥落するまでには至らなかったが、この戦いは1422年まで続いた。

ビルマ国内において兄弟関係にあるシャン・ビルマーモン・タラインの3民族が互いに闘争を繰返してきたのは種々な原因が附随していたにしても主な原因は前述した経済的理由であろう。

シンミナウ (Shin mi-nauk)

1389年、モーシャン族の首長であるソーングンポア (Tho-ngan-hpwā :) は美貌の娘シンミナウをミンダーゾワ王に献上して来た。王は大臣ポーヤーザーと相談した結果、ミンソエに与えることに決めた。ミンソエも、ポーヤーザーの言葉に従って、彼女を娶って妻とした。この同じ年に、タライン族の王ヤーザーダリの息子ボーローチャンドー (Baw-law-kyan : daw) は陰謀の嫌疑があるとして父によって処刑された。彼は死の直前に、ウ・ミンハンによれば、「タライン族の敵であるビルマ族の間に生れ変って、タライン国を足下に踏みにぢらん」と誓って、彼が身につけていた飾り物をすべてシュエモード・パゴダに献じて祈った。そして彼はその場で毒を飲んで生命を絶った。やがて、ミンソエの妻シンミナウは懐妊し、1390年ミンイエチョーゾワ (Min : -yèkyaw-zwā) を生んだ。ヤーザーダリはミンイエチョーゾワこそボーローチャンドーが最後の祈願通りに生まれ変ってきた化身であると思い込んだ。シンミナウは今日の伝説中にアナウンミパヤー Nat として知られている。

レッヤーピャンチー (Let yā pyan hkyi)

とノーヤター (Naw-ya-htā)

1390年、ヤーザーダリはミヤウンミヤの太守ラウピャーを撃ち亡ぼしたので、ラウピャーの子ビヤコン (Bya-kwon) と養子ビヤチ (Byakyi) はインワのミンダーゾワ王の元へ手兵と共に逃げてきた。王はビヤコンに“ノーヤター”という号をあたえてサリンの太守に、また、ビヤチには“レッヤーピャンチー”という号をあたえてプロームの太守に任じた。

ラウピャーがミンダーゾワ王に対しそれ程の援助もせず、ただ彼の味方であったという理由だけで、ラウピャーの子たちを救ってやったことは王の義理の固さを表わしていると思われる。

ミンダーゾワ王はその治世の大半を戦いのうちに過ごしたと言われているが、王はできる限り無駄な戦闘を避けんと努力していたこともうかがわれる。1391年、ターヤーワディで白象が見つかったことをプロームの市民が王に伝えて来たので、ミンダーゾワ王は兵を連れて現場に至り、白象を調べていたところ、折しもタライン族の王ヤーザーダリが象馬部隊をひきいて、ターヤーワディの近くに達したことを聞き知って、ミンダーゾワ王は、「わしは戦争をするためにこの地へ来たのではなく、白象を捕えるためにのみ来たのだ。わしには良象・良馬・良い兵士等が大し

で多くない。従って今は彼と勢力を競うべきでない。」と云って、プロームへひき退き、都へ帰って行った。

モーニン (Mō:hnyin:) のシャン族

1392年、モーニンのシャン族が騒々しくなり、モーニンの領主ゾーチポー(Tho kyī hpwā:)の義兄弟に当るゾーハンポー(Tho han hpwā:)は軍をひきいて、ビルマ側のミエドウを占領した。そのことを聞き知ったミンダーゾワ王は水路部隊を指揮してタガウンまで進んだ。陸路からは他の将軍に指揮をとらせた。陸路を進んだビルマ軍は途中にてゾーハンポーの軍に遭遇したが、シャン軍の方が有勢で、ビルマ軍は退却し、サガインにて防ごうとするのをシャン軍は追撃する手をゆるめず、サガインの都にせまり、都の外側にある寺院や人家に火を放った。

一方、ミンダーゾワ王もタガウンより一目散に引き返し、インワの都城を固めた。そして、遠方の太守たちを召喚して、シャン軍と戦わせることにした。ヤメディンの太守ティラワが先づ第一に馳せ来たって、シャン軍をサガインより撃退し、手に入れた象馬及び捕虜たちをミンダーゾワ王の元に送り、*ティラワ自身は王の元に到らず、ヤメディンへ帰って行った。そのことを王は立腹したが、大臣ポーヤーザーが王を宥め訓して始めて、王の怒りがほぐれた。そして王は多くの賞をヤメディンの太守へ送らせた。ヤメディン及びタウンゲーは当時ミンダーゾワ王に隷属したビルマ領であった。

*ティラワが王の所へ顔も出さず、帰国したのは決して王に対する悪意やまたは偏見のためではなく、彼が生れつき無口で、長上に対し自らの功を見せびらかすような気持のなかったことを示していると思われる。

ピンヤ時代にそれぞれ独立したモーニンやタガウン等を含む北部一帯をこのインワ時代にミンダーゾワ王はビルマ側に併合してしまった。

An-gyin: に つ い て

Hm. Yaz. I, p. 477によれば、ミンダーゾワ王がタガウンの町へ御座船にて河を逆上る時、船を漕ぐ者たちが歌う Hpaung-ngin-gyin: (御座船を引張る歌) を An-gyin: と呼んだ。An-gyin: は boat-song より発達した一種の叙情詩で、An は、Bur-Eng Dict. Part III p. 180によれば、恐らくパーリ語 anava (=海, 河) より由来しているらしく、An-gyin: という語はミンダーゾワ王の時代に発生したと云われている。An-gyin: は呼び掛けの言葉で始まり、呼び掛けの言葉で終るのであって、例えば、初めに 'Min: gyin: le!'—'Nat-min: le!' 等の呼び掛けで始まれば、終りにも 'Hpaw gyin: do le!'—'Min: gyin: do!' 等の呼び掛けで結ばれる応答頌歌である。この詩は古パガン時代にも用いられていた型式であつたらしい。ずっと下ってこの時代に、インワの宮廷にて女官たちが55種類の髪のかき方を歌ったものがあつたという。ずっと後の時代に至っ

て、17世紀に女官であった Yawe Shin Htwe によってこの型の詩が紹介されている。

ヤメディンの太守ティラワ (Thilawa) の性格

1395年、ヤメディンの太守ティラワが亡くなって、その弟マハーピャウ (Mahā Pyauk) がヤメディンを治めた。前述した通り、ティラワは無口な人であり、人前で目立ったことや見せびらかすことを嫌った。笑うことはほとんどなく、Hm. Yaz. によれば、彼の一生涯のうちで3度しか笑わなかったそうである。しかし、心は正直誠実で、実行性に富み、勇敢で策略も巧みであった。

Hm. Yaz. p. 477には、ティラワは一生のうちで3度しか笑わなかったという逸話が次のように述べられている。

ある時、一人の野人が鶏の献上品を太守に献じようと、ティラワの御殿に上ったところ、太守の姿が見えなかったので、そのまま御殿より降って行こうとするのを、ティラワの妻ソーパレが見て、「私は太守の妻であるのに私にも献上品を預けずに帰って行かれるのですね。私は夫君の栄光によって生計を立てる者です。」と云っているところへ、ティラワが帰って来たので、妻は黄金盤をもって出迎え、足を洗った時、「私の妻には今日何か訳があるのだろうか」と云って、ティラワはにっこりした、という。

また、ある時、ティラワが都城の上で日向ぼっこしていると、一人の還俗僧が（恐らく坊主頭を隠すため）頭にターバンを巻き、壕の中で水浴しているのを見て笑った、という。

もう一つの話は、ヤメディン城市の周囲にシャン軍が続々と攻め寄せて来るのを尻目に闘鶏を見るのに夢中になって、そこから立上ろうとしなかった。妻のソーパレは胸を打ち（ビルマ人が驚きを表わすときの表情）、胸衣が解け、髪を乱して馳けて来、「敵が城外に満ちているのに平気で闘鶏を楽しんでいらっしゃるのですか。」と言ったソーパレの慌てふためく様子を見て、にっこり笑った。ティラワは直ちに味方の兵と共にシャン軍を撃退した。

1399年、ミンダーゾワ王はミンネミ (Min : Nemi) をタウングーの太守に任じた。その時以来、タウングーをインワの王が権威を以て指令を下すことが多かった。

ミンダーゾワ王は1400年、33年間の王位を全うし、70才にしてこの世を去り、その後、太子タヤービャーが王位を継承した。

ミンダーゾワソーケ王の時代には智者が輩出し、文武に傑れた人物も多かった。彼は法の教えを説いて世を治めたので、国は大いに栄えた。

シンビューシン（白象主）タヤーバー
(Hsinbyūshin Taya byā:) (1400～1401年)

ミンデーズワソーケ王が亡くなって、長男であった王位継承者はシンビューシン・タヤーバーの名で王位に即いた。この哀れな王は在位僅か7カ月にしてこの世を去ったのであるが、王の末路について、ウ・ボチャの「ビルマ史」によって述べると、

彼は王となって5カ月を経た時、従者と共にアウンピンレーへ野遊びに出かけ、王は従者たちと離れて道に迷い一人ぼっちでジャングルの奥深く入って行った。折しも一人の行者が現われ、王の右手に巻いてあった飾りの貝がらを求め、それを与えて呉れるならば、王の願いはすべて叶われる力を与えようと云うのであった。すると、王は自分が欲するものは仙女であると、云った。行者は呪文を唱え、一人の仙女が王の前に現われ、王は仙女と結ばれるが、同時に、行者の姿は消えた。王が仙女を手に入れた後、仙女も姿を消した。その時より、王の気が変になり、宮廷へ帰ってからも、王は宮廷生活を乐しまず、常に苦しみ続けた。そして宮廷を出て魚つりに気を紛らわしていたが、やがて仙女に対する愛慕の苦しみのため王はこの世を去って行った。

しかし、Hm. Yaz. 及びその他の「ビルマ史」では王の護衛に当たっていたタガウン出身のソガナウサン (Nga-nauk hsan) がタヤーバー王を殺害した、と記されている。その後、ソガナウサンは宮廷にて身辺を固めていたが、大臣高官たちは相談して、彼を撃ち亡ぼした。そして、ミンデーズワ王の次男ミンソエを王位に即かせることに決定し、彼にそれを伝えたところ、彼にはいまだそれ程強固な軍力をもっていないという理由で、一度は王位に即くことを拒んで、彼の叔父に当たるヤメディンの太守マハーピャウを王位に即かせるように推薦した。しかし、ミンソエの弟シンティダッ (Shin Thiddhat) は、マハーピャウが進軍してくるのを誤って迎撃してしまったので、その兄ミンソエが王位に即くことになった。

参 考 文 献

- U Hpō:Kyā: : Myanmar Yāzawin Akyin: (1937)
U On Maung : Myanmar Yāzawin Thit (1953)
U Min: Han : Myanmar Naingngandaw Hket-laik Yāzawin (1937)
Hman-nan: Mahā Yāzawin, Vol. 1
G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
D. G. E. Hall : Burma (1950)
アーサー・フェヤー 岡村武雄訳: ビルマ史 (昭18年)
Tekkatho Tin Ai : Sagā:bon Wutthu Pon Pyin myā: (1962)
ビルマ政府の要請によって多数の学者の執筆になる U Kyaw Dun: 主筆 : Myanmar Sānyun Paung: Kyan:
Vol. I, II (1948, 1953)
C. W. Dunn & Hla Pè : Burmese-Eng Dict Part I, II, III, IV
UOn:Shwe : That-Pon-Abhidhān (1956)
Judson : Bur-Eng Dict (1953)

U Won : Takkatho Myanmā Abhidhān (1963)

U Maung Gyī:: Pāli Abhidhān-hkyut

水野弘元著 : パーリ語辞典